

薬剤師のための情報誌 [マルホ スクエア]

maruho square

No. 5



ドゥワーギ広場 (グダニスク)

保険薬局マネジメント

イオン・ハピコム人材総合研修機構の取り組み
—地域医療に貢献できる「かかりつけ薬剤師」の育成

医療制度改革と保険薬局

薬剤師による在宅医療
—在宅医療スタッフ、患者さん・家族の認知度向上からスタート

地域医療連携

在宅医療と施設との関わり

リスクマネジメント

分割調剤の積極的な取り組みと実態分析

皮膚外用剤の基礎知識

皮膚外用剤の塗り方—塗布順序

Question & Answer

よくある質問にお答えします

マルホ株式会社

薬剤師による在宅医療—在宅医療スタッフ、 患者さん・家族の認知度向上からスタート

株式会社エムワン はあと薬局在宅センター センター長 三浦弘臣 先生



在宅や介護施設での医療は薬物治療が中心であり、現場からは薬の専門家である薬剤師に対して積極的な参加を望む声が高まっている。三重県松阪市を中心に5店舗の薬局を展開する株式会社エムワンは、2008年4月に、薬剤師が在宅医療に注力することを前面に打ち出した「はあと薬局在宅センター」（松阪市黒田町109）を開業。まずは、「薬剤師による在宅医療」について在宅医療スタッフ、患者さん・家族の認知度を向上させることから取り組んだという同センター長の三浦弘臣先生に、これまでの活動とそこからみてきた課題、今後の展望などについて伺った。

薬剤師の在宅医療に対する認知度の低さを痛感

—まず、三浦先生が、はあと薬局在宅センターに勤務されるようになった経緯を教えてください。

三浦 私は15年間ほど病院薬剤師をしていました。病院勤務では、退院後の患者さんの薬物療法のフォローを行うことはできません。入院中の患者さんの様子はよく分かっていますので、特に1人暮らしや高齢の患者さんについて、「退院した後、あの患者さんは自宅できちんと薬を飲んでいるのだろうか」ということが常に気になっていました。そうした気持ちが、やがて「自分が患者さんのところに訪問し、その場で薬の相談を受け、薬をきちんとかきめするように支援しよう」とへと変わり、薬剤師の在宅医療に力を入れるという当センターが開業されると聞くと、居ても立っても居られず、ここに飛び込むことにしました。

—開設当初から、在宅医療を積極的に展開できたのでしょうか。

三浦 いいえ。一般に、薬剤師による在宅医療は、在宅療養支援診療所などからの要請により始まることが多いのですが、当センターは、薬剤師の在宅医療の拠点を開設したという事実からスタートしました。実際、当センターは医療機関の門前薬局でもなければ、近隣に医療機関

があるわけでもありません。当初は問い合わせも少なく、薬の配達業務が主の毎日でした。

しかし、薬を配達する際、患者さんや家族と積極的にコミュニケーションをとり、「薬に関して何か困っていることはありませんか」と、こちらから訊ねるようにしていると、段ボール箱いっぱい詰めた薬を持ち出し、「どうすればいいのかわからない」と嘆く患者さんがいたり、配達時に偶然患者さん宅に居合わせた訪問看護師やヘルパーから、「薬の管理で困っている」という窮状を訴えられることがしばしばありました。

つまり、患者さんや家族も訪問看護師やヘルパーなどの在宅医療スタッフも、薬物療法に多くの問題を抱えているにも関わらず、それを誰に訴えればいいのか分からずに困っていたというわけです(図)。言い換えれば、薬剤師が在宅医療に関わるということが、あまり知られていないということです。こうしたことから、まず薬剤師による在宅医療の認知度を高める活動に取り組むことにしました。

訪問看護ステーションとの連携をきっかけに 在宅医療への本格的介入を始める

—具体的な取り組みについてお話しください。

三浦 まず、当センターの在宅医療への本格的介入のきっかけにもなったといえる「訪問看護ステーションとの連携」です。これは、私が病院薬剤師時代に懇意にしていた医師から、研究会を立ち上げるので世話人の1人になってほ



はあと薬局在宅センター



図. 訪問看護師、ヘルパー（4施設、28名）に対するアンケート結果（一部抜粋）

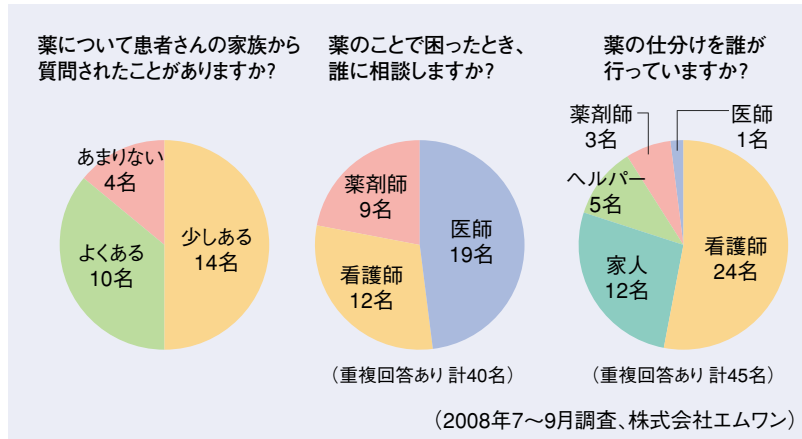


表. 定期勉強会

- 訪問看護ステーション定期勉強会
 - 第1回 「麻薬の選択基準、使用方法と副作用対策について」(2008.11.29)
 - 第2回 「経腸栄養剤の種類とその特徴について」(2009.2.25)
 - 第3回 「認知症の病態とその対応について」(2009.4.22)
 - 第4回 「パーキンソン病とその病態について」(2009.7.8)
 - 第5回 「糖尿病とその病態について」(前編)(2009.9.9)
- 高齢者専用賃貸住宅定期勉強会
 - 第1回 「口腔ケアの手順—意義、注意点について」(2009.8.26)

しいと要請され、2008年6月にその会合が初めて開催されたときに、訪問看護ステーションから参加していた理学療法士との出会いから始まった連携です。

会終了後しばらくして、その理学療法士から「末期がんの在宅患者さんで、訪問看護師がオピオイド製剤の管理に苦慮しているのを相談にのってもらえないか」との連絡を受けました。すぐさま訪問看護ステーションを訪ねて話を聞くと、患者さんは病識がなく、痛みがあるとオピオイド製剤を勝手に飲んでしまうので、主治医が怖がってオピオイド製剤を中止したため、痛みのコントロールができず困っているとのことでした。そこで、訪問看護師、ケアマネジャーなどとともに主治医を訪問し、薬剤師が在宅医療に介入すればどのようなメリットが得られるのかを説明しました。主治医はまさに目から鱗だったようで、ここでも薬剤師による在宅医療の認知度の低さを改めて痛感させられました。主治医にパッチ製剤でがんの痛みをコントロールできる可能性を提案したところ、それが奏効し、薬剤師介入のメリットを示すことができました。

この事例により訪問看護師から信頼を得ることができ、訪問看護ステーションからの要請を受け、2008年11月から2ヵ月に一度、看護師、ケアマネジャー、ヘルパーなどを対象に定期勉強会を開催することになりました(表)。そうしたことで、より一層連携が深まるというよい循環に入ったように思います。

この訪問看護ステーションとの連携により、在宅医療を受けている患者さんから栄養食品、流動食、高カロリー、高タンパクの食品の相談が多数あり、そういった商品を薬剤師が選び、届けるケースも増えてきました。このように処方箋以外の部分でも要望が増え、そこから在宅医療に介入していくケースもあります。

——在宅医療で薬剤師介入のメリットさえ分かってくれば、活躍の場は増えるということですね。

三浦 そうです。しかし、それまでに時間がかかるのが

現実です。特に松阪市のような地方では、薬剤師の在宅医療に対する認知度が医療スタッフでさえもまだ低く、今は薬剤師が薬局から外に出て積極的に地域と交流し、在宅医療における薬剤師の役割を知らせるきっかけをつかむ大切な時期だと思っています。そこで、これから在宅医療を提供している施設に対し、薬剤師による在宅医療の内容を具体的に示したパンフレットをつくりアピールしていこうと考えているところです。

在宅医療を円滑に行う仕組みの構築を目指す

——それでは今後の課題、展望についてお聞かせください。

三浦 最終的な目標は、地域全体で多職種との連携により円滑に在宅医療を推進できる仕組みを構築することです。そのために、訪問看護ステーションのほかに、2009年8月からは高齢者専用賃貸住宅でも、看護師、ケアマネジャー、ヘルパーなどのスタッフ向けに薬剤師による定期勉強会を始めました(表)。訪問看護ステーションでの勉強会には、2010年3月開催から地域の他施設のスタッフも参加することになっています。地域に開かれた定期勉強会を通じて、多職種との連携を深めようという狙いがあります。

また、麻薬小売業者間譲渡許可を申請すれば、他の薬局との間で麻薬譲渡が可能となりますので、連携薬局を増やしていくことで、地域全体で終末期医療の急な要請にも応じられる体制を整えようと考えています。さらに、地域薬剤師会との連携も深め、松阪地区で在宅医療が可能な薬局の協力体制の構築も目指しています。

2009年9月からは、当社の薬剤師を対象に毎月1回のペースで「在宅医療研究会」を開催し、症例検討を行いながら自らの資質向上に努めています。ある程度、研究会の形ができあがれば、今後は地域での研究会に発展させていく予定です。

——本日はありがとうございました。